

ヤンゴン素描 No.23

山形洋一

タマイン 市場に占拠されたプラットホーム

ヤンゴン中央駅から時計回りに13番目のタマイン駅は、忙しく賑やかな駅だ。駅舎やホームは隣接する公設市場の延長となり、商品と売り子であふれ返っている。足の踏み場をもとめてホームの端近くで列車を待っていると、「危ないから後ろへ下がらなさい」と注意される。列車が止まらぬうちに窓から、デッキから、荷物が投げ落とされたりするのだ。乗降客がデッキでもみ合うこともしばしばだが、運転手も心得て、規定よりはすこし長目に停車している。



図1. タマイン駅の裏道。土嚢を積んだ階段で市場の塀を越える

「タマイン」(Thamaing) は辞書に「歴史」とあるが、より具体的には、ヤシの葉(貝多羅葉、ばいたらよう)に鉄筆で書かれた古文書や、絵を交えて寺の由来を示す「縁起絵物語」を指すことがある。日本でも浅草寺や比叡山延暦寺の沿道に寺の縁起を描いた看板絵が並んでいるが、ミャンマーでは仏塔に至る階段の両側に掲げられることが多い。タマイン駅の東にはモン族が建立した古寺チャイッ・ワインがあり、駅名はそれにちなんだのかもしれない。「歴史駅」より「縁起駅」の方が座りが良いと思うが、本当はどうだろう。

駅の東は第二次英緬戦争(1824-26年)の戦場だったコカイン丘陵に向かってせり上がる。

三次にわたる英緬戦争のうち、ヤンゴン周辺が主戦場になったのは第二次までだ。それから約1世紀、第一次世界大戦後の好景気でココイン丘陵には別荘が建ちはじめた。

1925年、貯水池としてココイン湖（現インヤ湖）が完成すると、ブタヨン（駅前）道路は湖の北をめぐるココイン道路とがつながった。ヤンゴン北部を東西につなぐ主要道路だが、東ではダム脇を南下して、ンガモーイェッ・クリーク（川）には至らなかった。

1942（昭和17）年発行の『ビルマ地名要覧』（タネ本は英国の地名辞典 *Gazetteer*）によると、タマインには畜家市場が置かれていた。今見る公設市場の先祖である。

1952年、第二次大戦後の世界平和を祈念してカバエイ・パゴダが建設され、ココイン道路の東半分は「カバエイ・パゴダ道路」、西半分は「チャイッ・ワイン・パゴダ道路」と呼び分けられるようになった。継ぎ目はピー道路の8マイル交差点である。

1994年、ライン川にバインナウン橋（*Bayint Naung*, 勃因囊王の名にちなむ）が掛けられ、西のラインタヤー工業団地や、エーヤーワディー・デルタの穀倉地帯と直結した。以後タマイン市場はあっという間に賑わうようになる。

西部幹線道路に連なるチャイッ・ワイン＝カバエイ道路と、ンガモーイェッ・クリークを東に渡るパラミ道路とは、平行している。パラミ道路の西端はタマイン駅の南のオッチン駅。その間わずか400メートルである。このようなクランク（段違い）構造は、小田原などの城下町で見かける防衛設計で、ヤンゴンではチミンダイン駅の東や、インセインの東に見られる。またシュエダゴン・パゴダの北には二つの東西道を南北につなぐリンクロードがある。ビルマ語の「リンラン」は楽し気な響きだが、一朝有事のおりには交通を遮断する急所として用意されたもので、敵意が隠されている。

防衛設計は外敵に囲まれた土地に生まれる。ラングーンの町を設計した大英・インド帝国は、「原住民」による反乱をつねに警戒していた。その緊張からくる神経症はジョージ・オーウェルの小説『ビルマの日々』に活写されている。独立後に政権をとった国軍もまた、少数民族や民衆の蜂起を恐れつづけた。ラングーン＝ヤンゴンは窮屈な骨格のまま太りつづけてきたのだ。

2013年に発表された首都圏開発計画では、「8マイル」交差点が交通の要衝、経済活動の中心となるよう企画されているそうだ。ヤンゴン市の形も「守りの姿勢」からようやく利便性の時代へ転換するのだろう。それはめでたいのだが、私にはタマイン駅で胡坐をかいている「肝っ玉母さん」たちの行方が、すこし気になる。



図2. チャイツ・ワイン・パゴダのボーボーギー像

ところで、シュエダゴンの大塔は東西南北の四方に門を構えているが、その方角は真の東西南北ではなく、反時計まわりに約15度ずれている。ずれた南北軸、より正確には345度—165度軸は、バゴー・ヨーマの向きとほぼ一致する。この山脈を北へたどればヒマラヤ山脈に至るわけで、伝説の二人の商人、タプーサとバツリカが悟りを開いて間もないブツダからいただいた聖髪を収める場所を探して、ヒマラヤの裾に至った、という伝説に基づくものだろう。つまり北門は真北からずれても、まっすぐヒマラヤを指しているのだ。北門の脇にバルー像が置かれているのも、また二体のうち一体が盗まれたことも、世界軸と無縁ではなさそうだ。

タマイン駅の東にあるモン族の古寺チャイツ・ワインは、シュエダゴン北門の延長線上に位置し、その南門はシュエダゴン北門と向きあう方角（約165度）を向いている。つまりチャイツ・ワインはシュエダゴンとヒマラヤの中継点として置かれたものと見える。

ところが近年、そのさらに北北西に軍政府が「施無畏寺」を建立して、ヒマラヤとチャイツ・ワインの間に割って入った。しかも YCDC 発行のヤンゴン市地図帳を縮刷した一枚図（縮尺 48125 分の 1、2001 年 YCDC の承認のもと MAPS 発行）では、チャイツ・ワイン・パゴダが省かれている。不注意とみるにはあまりに重大で、故意のように思えてならない。ビルマ族の本能として、モン族の先進文化は軽視されつづけてきたからだ。

個人主義にならされ現代人は、宗教を個人の心の問題としてのみとらえがちだが、多額の資金を要する宗教建築には、宗教に託した政治意志がときに推進力となる。民衆の宗教心が生きているミャンマーでは、それを利用する政治意志も強靱だ。だが日本の仏教遺産もまた、かつてはそうした世俗的意志との絡みのなかで形作られてきたのだろう。

(了)